日常生活を通して感じるオランダの街づくり

前アムステルダム日本人学校　教諭
長野県信州新町立信州新町小学校　教諭　原　山　千　廣

キーワード：スーパーマーケット，ゴミ対策，公共交通機関の発達，自転車通勤

１．はじめに

「コンビニ」や「24時間営業」などに代表されるように，日本は住むのに不自由を感じさせない国である。顧客のニーズを第一優先に考え，採算が取れるようであれば，次から次へと新しいシステムや商品が企画され提案されてくる。

しかし，その一方で，私が赴任したオランダではコンビニもなければ24時間営業の店もガソリンスタンドを除いてはほとんど無く，当初は大変不便を感じた。しかし，いったん生活をしてみると，日本では不可欠だったコンビニなどが無くても人間は十分生活していくことができ，また，その便利さが無いがゆえに，生活の中に時間的なゆとりと工夫が生まれてくることに気づいたのである。「便利でないからゆとりが生まれる」という感覚は，日本人からすると不思議に思うかもしれないが，店が開いていないからこそ，物が無いなりに過ごす術を考え出し，工夫するのである。オランダではこのようなことがごく自然で，しかも無理なく行われているように感じられる。この過ごす術は，スーパーマーケットやゴミ対策，公共交通機関の発達，自転車通勤などにも見ることができる。そこで本レポートでは，オランダにおけるそれらの具体的な場面を取り上げることにより，日本の暮らしと比較する上での示唆になればと願った。

２．オランダにおける街づくりの実際

(1) スーパーマーケット

①買い物袋の有料化

買い物に行く際は必ずマイバッグを持参する。マイバッグを持参していない場合は，１袋５～10セント（日本円で約９～17円）のビニール製の簡易袋を購入する。買い物袋が有料化されているため，マイバッグを持参する割合が高くなるという訳である。

②ビールビンやペットボトルには回収補償金

ビールビンやペットボトルの回収率を高めるため，１ビンあたり10～50セント（日本円で17～85円）の補償金が加算された価格で販売されている。使用済みのビンやペットボトルは，スーパーマーケット店内に設置されている回収器に投入することで補償金が計算され，レジでの支払い時に合計金額から補償金分を差し引いてもらえる仕組みになっている（＝写真右）。こうすることで，ビンやペットボトルが街中に散乱することがなく，買い物客にとってもビンやペットボトルはお金に換えられるので，安易にゴミ箱に捨てることがないのである。

飲み終えたビンやペットボトルを回収器に投入

③計り売り，卵のパック

野菜売り場では，自分が必要な分だけ買い求められる「計り売り」が一般的である。買い求めたい野菜をビニー

ル袋に入れ，台ばかりにかける。そうすると重さに応じて価格が表示され，値札シールが打ち出されてくる。それを袋に貼ってレジに持って行くというシステムだ。こうすることで，野菜をトレイに入れたりラップで包装したりする手間が省け，容器の無駄も省けるという仕組みだ。

また，卵のパックはプラスチック製でなく，紙製だ。次回，その紙製の容器を持参すれば，そこに卵を入れてもらうことも可能で，容器の節約にもつながっている。

④ショッピングカートの使用には50セント

スーパーマーケットの出入り口付近には，ショッピングカートが鎖で連結されて置かれている。連結された鎖は50セント玉を入れて外し，スーパーマーケットの店内で使用することができる。買い物が終わるとまた元のカート置き場に行き，鎖でつなぐと先程入れた50セント玉が戻ってくる。こうすることで使い終わったカートはあちこちに散乱せず，元のカート置き場に戻すことができる。つまり，買い物客自らの力で，町を整頓しているというわけである。

⑤日曜日は休業，深夜営業店はほとんどない

キリスト教の影響が大きく関わっているため，一部の店を除き，大部分のスーパーマーケットや肉や野菜の専門店は日曜日は休業するのが一般的である。また，24時間営業の店はほとんどなく，どんなに遅くても夜８時までにはシャッターを下ろしてしまう。もちろん，街にはコンビニもない。確かに店が開いていれば買い忘れたものを買いそろえることができるが，一晩中，店内の照明をつけ，人件費をかけて店を営業するエネルギーはばく大だ。また，日曜日に街中の店が一斉に休業することで，店員の休息はもちろん，省エネルギー化にもつながる。日曜日は家族のだんらんを大事に考え，余暇を楽しむ。街は静かさを取り戻し，落ち着いている。何もかもが，商業ベースの日本とは大違いである。

⑥ビン容器が多い

ケチャップやマヨネーズ，ピクルスなどは，全体的にビン詰めで売られていることが多い。ビンはリサイクルに回され，再利用される。日本ではプラスチックケースが大半で，全体の重量が軽量化され持ち運びが容易にである。利便性を重視するか，リサイクルを重視するかによって，用いられる容器にも差異が認められる。

(2) ゴミ

①ゴミの分別，出し方

意外なことかもしれないが，日本ほどゴミの分別はなされていない。紙類とビン類は別に回収するが，可燃物の中にカンもガラスも一緒に捨てることができる。日本のように『ビン類』を「透明」「茶系」「青系」，『紙類』を「新聞」「雑誌」「ダンボール」などといったように，さらに分別することはしない。オランダでは，たいがいの物を燃やせて有害物質が出ない高性能の焼却炉を備えており，市民がゴミを分別する手間を省いている。ゴミの分別を進めれば進めるほど，それが面倒に感じ，結果的に不法投棄が多くなる危険がある。指定された曜日や週までゴミを自宅に保管するべきか，ゴミが出たらすぐ捨てられるようにすべきか，ゴミの捨て方についても差異が認められる。ちなみに，各家庭から出されるゴミを処理するための費用として，一家庭年額約200ユーロ（日本円で約34,000円）のゴミ処理税が課せられる。

②紙類やガラスの回収

紙類やガラスは地区の収集所に出さず，街中のいたるところに埋設されている専用ボックスに投入する。地域ごとに指定されたボックスはなく，どこの地域のボックスに入れても構わない。紙類は新聞，雑誌，ダンボールの区別なく一緒に投入でき，ガラス類も透明や色物の区別なく一緒に投入できる。曜日や時間に問わずいつでも捨てられるので，とても便利である。

③街中のいたる所にゴミ箱が設置

歩道の端や駅，バス停など，街のいたるところに緑色のゴミ箱が設置され，いつでもどこでもゴミを捨てることができる。また，自転車王国オランダでは，乗っている自転車からもゴミが捨てられるように，バスケットゴールのような網状のゴミ箱が自転車の高さに合わせて設置されている。わざわざ自転車を降りなくても，ポイ捨て感覚で網状ゴミ箱にゴミを捨てることができるのである。日本では，公共の場にゴミ箱を設置すると，無料で家庭ゴミを持ち込めるとあってゴミがあふれ出してしまう問題が起こるが，オランダではどこにゴミを出しても，ゴミ処理税を使ってゴミを回収し，処理をするので，公共の場のゴミ箱からゴミがあふれ出すことはない。ゴミ箱があちらこちらに設置されているので，街がきれいに保たれている。

(3) 公共交通機関

①路面電車（トラム）

首都アムステルダムの街中には，路面電車（トラム）が縦横無尽に走り，市内の移動には大変便利である。乗車の際にはストリッペンカルテンと呼ばれる回数券を使用する。この回数券はバスの乗車にも使用でき，一定の時間内であればトラムからバスへの乗り継ぎも可能で，利便性がよいため利用率が高い。したがって，通勤や通学における自家用車使用の抑制に貢献している。

②バス専用レーン，バス専用信号

一般車両を止め，バスの進行を優先させる

バスもトラム同様，たくさんの路線を持っている。特筆すべきことは，一般車両の道路とは別にバス専用レーンが整備され，しかもバス専用の橋までも架けられていることだ。また，高速道路が渋滞の時は路肩を走行できる許可が与えられている。さらに，交差点にはバス専用の信号が設置され，バスが交差点に入ると一般車両の信号が赤になり，バス専用の信号を青にして優先させる仕組みが整えられている（＝写真左)。したがって，バスは時刻通りに発着し，渋滞に巻き込まれることがまったく起こらない。マイカーを使う便利さよりも，バスやトラムなどの公共交通機関を使うことのメリットが強調された街づくりが行われていると言える。

(4) 自転車通勤

公共交通機関の充実もさることながら，一方で自転車通勤者に対しては，ある一定の税の減免措置がとられている。また，自転車はトラムや国鉄の車両内にも持ち込め，電車内には自転車を固定するスペースが用意されている。したがって，遠距離通勤者でもこの恩恵を受けることができるため，街全体としても渋滞の緩和やマイカー離れ等の促進が期待できる。

3．おわりに

現在，日本でも地球環境への関心が高まり，例えば，買い物に行くときにはマイバッグを持参したり，通勤通学や外出の際は，できるだけ公共交通機関や自転車を利用するよう促したりすることが多くなった。しかし，このような働きかけが成り立つには，少なからず利用者の犠牲が払われることが多い。マイカーは自分の時間に合わせて出発することができ，直接目的地へ行くことができるが，公共交通機関利用の場合は，特に地方ほど路線の本数が少ない上に，運賃が高い。いくら地球環境にいいとは言っても，利用者がかなりの不便や負担を強いられたのでは長続きはしない。

学校教育の現場においても，環境教育への取り組みが活発となり，様々な取り組みや報告が行われているが，利用者にとって何かしらのメリットが感じられないと，取り組みが提言だけのものに終わってしまう。本レポートで紹介したオランダの事例から学べるように，これからは様々な立場の人々が，それぞれにメリットを感じることができる，全体の利益という視点から環境教育の実践が求められるのではないかと思った。